

スペインの民間非営利組織プロジェクト・オンブレの取り組み —組織の共同体が持つ理念と体制に着目して—

井上 智恵ⁱ

本研究は、スペインの民間非営利組織プロジェクト・オンブレ (Proyecto Hombre, 以下 PH と省略する) が治療共同体 (Therapeutic Community, 以下 TC と省略する) メソッドを導入して以降、どのようにアディクション問題を持つ人達の回復の土壌を築いてきたのかを、組織が持つ共同体の理念とそれに基づく体制から明らかにする。研究方法は、筆者がスペインの PH セラピスト研修で得た情報、公開されている文献やデータなどを基に検証を行なった。PH の共同体が持つ理念は、PH がモデルにした TC から採用した支援の姿勢、哲学、「人」のコンセプトの要素からなる PH の「人間観」、組織の基本原則と活動指針から示した。組織体制と活動については、PH の成長と発展の過程、組織体制と構造、国内外での連携とネットワーク、活動状況から示し、PH の取り組みを明らかにした。その結果、PH の共同体における人間性を育む取り組みは、組織の発展だけでなく、人間関係を育む地域社会を築く原理になっていたことから、本研究は日本で依存症対策を推進していく上でも参考になると考える。

キーワード：プロジェクト・オンブレ、アディクション、薬物依存、治療共同体、支援活動

はじめに

アディクションとは、薬物、アルコール、ギャンブルなどの特定の物質や行動、関係性に心を奪われ、のめりこみ、制御できなくなることや、やめたくてもやめられない習慣に陥ることと定義されている (厚生労働省 2017)。アディクション問題は、依存行為による心身の健康被害に止まらず、家庭や職場などでの人間関係が壊れ孤立し、労働についても生産性の低下や負傷、失業など日常生活のあらゆる場面で影響が生じるものである。個人の嗜好の域を超えた社会的な影響や損失があることから、この問題は社会全体で取り組むべき課題である。

スペインでは、1985年に「薬物に関する国家計画 (Plan Nacional sobre Drogas, 以下 PNsD と省略する)」が作成され、同年にそれに基づいた自治州と自治都市レベルでの計画も作成されており、今日においては依存問題全般を想定したアディクション政策が展開されている。PNsD が策定された背景には、1977年から1992年までの間、ヘロイン依存者の増加に伴って、HIV 感染者数、犯罪件数の増加など深刻な社会情勢があった (Gamella 2014)。国の総力を挙げての対応に、公的機関も民間組織も精力的に薬物問題に取り組んできた過程がある。1984年に首都のマドリッドに創設された民間非営利組織プロジェクト・オンブレ (Proyecto Hombre, 以下 PH と省略する) は、ヘロイン依存者の問題に積極的に取り組んできた施設の1つで、その当時流行していた治療共同体 (Therapeutic Community, 以下 TC と省略す

i 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

る)のメソッドを活用したプログラムを提供してきた。薬物依存者を対象にしたTCは、1979年から1986年までの間、スペインで最も活用されたメソッドである(Comas Arnau 2006)。

TCには、精神保健領域において発展したTCとアディクション問題に対応するTCの2種類がある。本論文で取り上げるアディクション問題に対応するTCは、米国のシナノンを原型とし、De Leonによって理論化された(De Leon 2000)。TCとは、「個人のライフスタイルとアイデンティティの変化を促進するように意図したミクロな社会(共同体)のなかで、個人を情緒的に治療し、健全な生活に向けた行動や態度および価値を身に付けさせる方法(De Leon 2000)」(藤岡 2019: 19)のことであり、一般的なTCプログラムは、①共同体の独自性、②共同体の環境、③集団活動、④スタッフの役割と機能、⑤ロールモデルとしての仲間、⑥1日のスケジュール、⑦治療と教育を兼ねた取り組み、⑧ステージ制、⑨TCのコンセプト、⑩仲間同士によるグループワーク、⑪気づきのトレーニング、⑫エモーショナルリテラシー、⑬治療計画と期間、⑭ケアの継続性といった14種類の要素で構成されている(De Leon 1995)。TCの基礎となる共同体には、1. 参加者としての役割、2. メンバーシップとフィードバック、3. ロールモデルとしてのメンバーシップ、4. 個々の変化を導く集団、5. 共有した規範と価値、6. 構造とシステム、7. 開かれたコミュニケーション、8. 人との関係性、9. 独自の用語といった9つの基本的コンセプトがあり、それらを活用して共同体が築かれている(De Leon 1995)。TCプログラムでは、共同生活を通して社会性や対人関係能力を身につけるようになってきている。また、個人の能力、信念、価値などに重点的に介入する治療的教育的アプローチが行なわれ、個人の生き方そのものを問う仕組みがあることから、TCの基盤となる共同体の構築がいかに重要かを理解した実践が必要となる。

わが国でも治療や心理教育的アプローチにTCが

活用されているが、まだまだ発展途上である。2009年に官民協働刑務所の島根あさひ社会復帰促進センターの1つのユニットにTCが導入され、その刑務所内TCで繰り返される活動を映画化した『プリズン・サークル』(坂上 2019)が公開された。この刑務所内TCでは、再入所率の低下など有効性が示されている一方で、刑務所内での保安や規律の観点から受刑者が職員に物申すことなどを抑制する風潮が根強くあり、TCの枠組みではなく共同体の真髄である「場(共同体)」と「関係(関係性)」をどう作るかが課題とされている(毛利 2018)。また、薬物依存症回復支援施設ダルクの一部では、TCの主要なツールであるエンカウンター・グループが導入され(引土ほか 2018, 2019)、その技法をより導入し易いように『依存症者のためのエンパワメント・プログラム』(治療共同体研究会 2017)が開発された。しかし、「治療共同体の効果やプログラムが先行し、その効果を発揮するしかけとなる概念や実践モデルについて共有されていない現状」(引土 2010: 69)があり、TCの本質的な価値や理念を持った実践が行なわれていない。それでもTCへの期待と関心は高まり、2014年から引土が主導してきた治療共同体研究会は、2021年から「治療共同体ネットワーク」という名称に変更され、今日ではアディクション関連の援助職者だけでなく、TCに関心を持つあらゆる領域の人達が集う場となっている(治療共同体ネットワーク 2021)。さらに、『治療共同体実践ガイド』(藤岡編 2019)の書籍が出版され、2020年の日本集団精神療学会の大会のテーマが「治療共同体・再訪：考え続けるコミュニティ」であったことなどを見ると、特に対人援助職者が直面する職場での支援活動や連携に関する課題に対して、TCから解決策を得られないか、その糸口を探っている様に窺える。

PHについては、日本ではTCを活用する組織として知られるようになってきた。2014年にプロジェクト・オンブレ・ジャパン設立準備委員会(現在は一般社団法人オンブレ・ジャパン)が立ち上がり、2019年に同委員会が主催した「『いきる力』を引き出

す！スペインのプログラム」をテーマにした PH セラピストの来日公演とワークショップが行なわれたことから、PH の知名度が徐々に上がってきている (プロジェクト・オンブレ・ジャパン設立準備委員会 2019)。PH に関する文献は、先行研究 (井上 2014; 井上・近藤 2016; 近藤 2017, 2018)、2008 年度のファイザープログラムの助成金で行なわれた「薬物使用者を抱える家族への介入・援助プログラムに関する治療共同体研究」の報告書『スペインの治療共同体: プロジェクト・オンブレ研修報告』(全国薬物依存症者家族連合会 2009)、内閣府が公表した 2010 年度の『スペインにおける青少年の薬物乱用対策に関する企画分析報告書』(内閣府 2011) があり、それらにおいて PH の紹介、利用者の特徴、プログラムのコンセプトと種類、治療のプロセスなどの支援活動の一部が明らかにされている。しかし、PH の支援活動の基盤を成す共同体に着目した研究は見当たらない。そのため、本研究では PH の共同体が持つ理念と組織体制および活動を明らかにすることを目的とする。PH は、TC の共同体にある人との相互作用がもたらす変革の力動を活かし、発展してきた組織である。その力動によって創出される共同体の社会文化は、人間のあり様や本質を問う実践から生まれる人間性を育む文化であることから、PH の共同体のあり方はわが国で依存症対策を推進していく上でも参考になると考えられる。

日本では、2017 年に「依存症対策総合支援事業実施要綱」が定められ、それに基づく包括的な依存症対策を進めている (厚生労働省社会・援護局 2017)。全国各地で行政機関、医療機関、自助グループや民間団体などが連携しながら依存者や家族の支援を行なえるように支援体制を整備し、また支援にあたる人材を養成するなど様々な事業に着手している。地域のニーズに総合的に対応するために、地域支援ネットワークの構築を進め、社会的に弱い立場の人達が排除されない社会を目指している。この社会的包摂の観点から、TC の共同体のコンセプトに通ずるものがあり、今後、日本で TC を展開する上でも、ア

ディクション問題を持つ人達を包摂する社会を築いていく上でも、本研究は参考になると考えられる。私達が属する共同体や地域がより豊かになる方法や視点を、PH が築く共同体や組織の取り組みから得られると考えられるので、本研究には意義がある。

I. 研究方法

筆者は、立命館大学大学院博士課程後期課程国際的研究活動促進研究費を 2013 年度から 2016 年度まで受給し、スペインのアンダルシア州グラナダ県グラナダ市にある PH グラナダ支部を拠点に、アルコール、薬物、ギャンブルなどのアディクション問題を持つ人達へのプログラムや支援活動について調査を行なった。

本研究は、PH の共同体が持つ理念と体制に着目し、組織の取り組みについて調査することを目的にしていたことから、筆者自身がスペインの首都マドリッドにある PH 協会にて 1 年制のセラピスト研修「2014/2015 年度 第 53 期セラピスト研修」を受ける方法¹⁾をとった。セラピストに必要な基礎知識やスキルなどを習得するための理論編 240 時間を受講し、その理論編での学びを踏まえた実践編 960 時間を PH グラナダ支部で行なった。この研修中に資料やデータを収集し、今日の PH の支援活動がどのように築かれてきたのか、その成り立ちを歴史的背景から捉えるように努めた。特に PH がモデルにした TC から採用した「人間観」や共同体の観点、支援活動と実績、今日の組織体制に関する文献調査を行なった。文献調査は、理論編で収集した一部の資料 (Lanero 2014; Padrón 2014; Presencio 2014; Sabatés 2014a, 2014b) と Mario Picchi の文献などに加え、PH 協会のウェブサイト (<https://proyectoohombre.es/>) に記載されている組織の概要や情報、年次報告書、研究報告書、評価報告書などの資料をダウンロードして得たデータを中心に検証を行なった。

II. PHの理念を巡って

1. TCについて

1) スペインにおけるTCの歴史

Comas Arnau (2006)によると、薬物依存者を対象にしたTCは、1979年から1986年までの間、スペインで最も活用されたメソッドであるが、TC自体は当時のスペインにおいて目新しいものではなかった。スペインには、英国の精神保健領域で展開されたMaxwell JonesモデルのTCと、米国の薬物依存者同士による相互援助を基礎とする自助組織シナノンを原型としたDaytopモデルのTCの2種類が存在した。前者のTCは1960年代に精神保健領域において、すでに導入されていた。1970年代の精神科閉鎖病棟が開放化へと変遷する過程でTCの採用が考慮されなくなった。精神科医療の法改正ならびに1986年の一般公衆衛生法の策定直後には、精神保健領域においてTCが活用されなくなった。しかし、当時のヘロイン依存者に治療的教育的な支援を行なうためにTCメソッドが採用され、Comas Arnauの調査ではスペインで認可されたTCの施設数は119箇所あった(Comas Arnau 2006)。

また、民間非営利組織PHは1984年からTCを活用した「ベーシック治療共同体プログラム」を主に薬物依存者に提供している。PHでは、ギリシャの民間非営利組織Ketheaと共にTCの有効性に関する研究が行われ、その結果は2019年3月18日にオーストリアのウィーンで行なわれた第62回の国連麻薬委員会において報告された(Asociación Proyecto Hombre and Kethea 2019)。その報告資料には、利用者がTCプログラムを受ける前と後では飲酒や薬物使用、健康面、家族関係、社会的関係に改善が示され、今日におけるアディクション領域でのTCの効果と展望が記されている。

2) PHのTCの由来

Proyecto Hombreの「Proyecto」は計画を、

「Hombre」は人間を意味し、直訳すると「人間計画」になる。この人間計画の意味は、個々人の主体性を重んじ、生活ならびに人生の再構築を図るということであり、PH創設者らの思いが込められた名前である。PHが創設された1984年においては、TCメソッドを活用した「ベーシック治療共同体プログラム」が、主要な治療的教育的プログラムであった。その「ベーシック治療共同体プログラム」で活用しているTCは、イタリアのローマにあるProgetto UomoのTCがモデルになっていた。Progetto Uomoは、1974年にCentro Italiano de Solidaridad (以下CeISと省略する)が米国のDaytopの協力を得て設けたTC施設であった(Sabatés 2014a)。Progetto UomoのTCの由来は米国のDaytopになり、PHのTCもDaytopの要素を受け継いでいることになる。

しかし、Progetto Uomoを手掛けたCeISは、オランダにあるEmiliehoeveのTCへ視察に行っていることから(Sabatés 2014b)、厳格な規律や一面的な規則がある伝統的な慣習を持つDaytopモデルから、民主的な観点に趣を置いた寛容さと柔軟性も踏まえたTCへと編成している可能性がある。1972年に設立されたEmiliehoeveは、自助的な共同体や民主的な様式を持つ米国の精神科病院Hendersonの

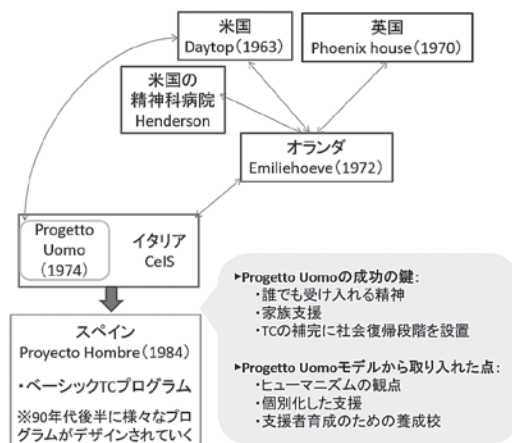


図1: PHのTCの由来

出典: Sabatés (2014b) の資料『Proyecto Hombre: Historia y Movimiento de las Comunidades Terapéuticas』の内容を基に筆者が図を作成

活動指針を採用した施設で、EmiliehoeveのTCは米国のDaytopと英国のPhoenix houseから要素を取り入れた混合型になるからである(Sabatés 2014b)。筆者が調査を行なったPHのTCも、共同体で起こる問題に対して伝統的な慣習に沿って解決を図るのではなく、共同体に関わる全ての人との話し合いを持って解決を図ることを重視しており、民主的な運営が見られた。ヨーロッパにある多くのTCは精神科病院の民主化運動を基点するMaxwell Jonesモデルの傾向が強いと言われており(Sabatés 2014b)、スペインのPHのTCもその影響を受け、且つスペインの多様な文化的側面を取り入れた独自性の高いものになっていると考えられる。その独自性を持ったPHの発展については、Progetto Uomoの成功の鍵となった誰でも受け入れる精神と家族支援を取り入れ、TCの補完に社会復帰段階を設置したこと、またProgetto Uomoモデルからヒューマンニズムの観点、個別化した支援、支援者育成のための養成校を採用したことにあると言われていた(Sabatés 2014b)。

歴史的背景から見ると、先駆的に薬物依存者の回復のためにTCの活用と導入に尽力してきたのは、米国のDaytopと英国のPhoenix houseである(Sabatés 2014b)。TCを手掛ける支援者同士の協力態勢は、今日では世界治療共同体連盟、ヨーロッパ治療共同体連盟など連盟として組織化されている。PHもそれらの連盟に所属し、理事を担うなど、その活動には支援の真髄となる精神が感じられた。次節では、PHの「人間観」について述べる。

2. PHの「人間観」

本研究では、人間の有限性や状況性をめぐる人間性の探求が行なわれる思想のことを「人間観」として扱っている。人間性の概念はラテン語のhumanitasからきており、それは一般的に人間性を尊重し、これを束縛し抑圧するものからの人間の解放を目指す思想であり、ヒューマンニズムの中心をなすと言われていた(下中編 1982)。この言葉の創始

者であるローマの共和制末期の政治家で哲学者でもあったキケロは、自己および時代の要求に促され、人が高貴な意味における人間であるためには何を目標として努力すべきかを問い、ローマ人の生活の理想をギリシャの生活や文化に求めたとされている。人間性には、人間に備わっているあらゆる人間的なもののいっさいを意味すると同時に、人間を人間たらしめるもの、人間の本質ないし理想をも示す2重の意味があると言われていた(下中編 1982)。

PHの「人間観」は、PHを創設した先駆者らがモデルにしたTCから支援の姿勢、哲学、「人」のコンセプトを中心に形どられた思想であったことから、それぞれの由来と内容について述べる。

1) 支援の姿勢

PHの支援の姿勢は、イタリアのローマにある施設「CeIS」の創設者であるMario Picchiの精神に由来があると言われていた(Presencio 2014)。CeISの支援活動は、Mario Picchiと彼の活動に共鳴した市民がはじめたのが発端であり、人間に普遍的に備わる価値と宗派の1つである福音派の価値に着想した活動であり、戦争、飢餓、貧困、若者の社会不適応に関する啓発を市民に対して行なうものであった(Picchi 出版年の明記なし)。また、彼らは講演先、教育機関、道、駅、教会などのあらゆる場で、人との対話を通じて個人の感情や考えを呼び起こし、排他的な行動には粘り強く接し、人の成長や成熟をサポートするために適切な手段を探し求め、特に若者が問題や苦しみから脱することができるよう支援を行ってきた。その活動の礎は奉仕の精神であり、政治的ならびに宗教的な活動や勧誘とは一線を画すものであった(Picchi 出版年の明記なし)。

PHの支援者を対象にしたセラピスト研修では、Mario Picchiの言葉「真の教育的プロジェクトは、自己理解を深める経験のことである。それは自由のための教育であり、他者と友愛の精神を分かち合い、隠れた潜在能力を引き出すものである」や「薬物の問題は乗り越えられるが、1人では乗り越えられない

ことを確信したところからはじまった」などが紹介されていた (Presencio 2014)。現場では、セラピストはどのような状態の人であっても来所した人を受け入れ、ありのまま受容していた。また、薬物使用をせざるを得ない状態を捉えた上で、今の状態より少しでも良くなる方法や手段と一緒に考える支援が行なわれていた。それは薬物使用をやめさせる支援ではなく、生活を営むための支援であった。常に対話を通して個人が生きる希望や活力を持てるようにアプローチし、個人の潜在能力を伸ばしながら生活再建を図っていた。セラピストは個人の成熟の過程に寄り添う姿勢をとり、Mario Picchiのヒューマニズムの観点は、今日においてもPHの基本的な支援の姿勢としてセラピストに受け継がれていた。

2) 哲学

PHの哲学は、米国のDaytopの哲学を応用している。その哲学とは、以下のようなものである。

「私たちは避難場所がないのでここにいる。結局は自分で来たのだ。他者の目や心に曝された自分に直面するまで、人は逃げ続ける。自分の秘密が他者に知られることを許せるようになるまでは、他者から安全にはなり得ない。知られることを恐れている限り、自分をも他者をも決して知ることはできない。いつまでも孤独である。私たちのところ以外に、どこでそのような鏡を手に入れることができるだろうか？ここでは、少なくともまともな人間は自分自身の姿がはっきりと見えるようだ。夢の中の巨人でもなく、悪夢の中の小人でもなく、目的を共有した全体の一部としての、ひとりの人間と見ることが出来る。この考えの上で、私たちは根を下ろし成長することができる。結局のところ、もはやひとりではなく、自分自身に対しても、他者に対しても生きているのだ。」(ホワイト1998: 260)

一般的に哲学のあり方として、「①哲学は自然および社会をつらぬく最も一般的な法則性を探求し、この意味においては世界観である。②しかも哲学は同

時にまた自然のおよび社会的環境に対するわれわれの実践的な態度を問題とし、この意味においては単なる技術的な知識ではなく生きた思想の性質をもつ。③哲学は単なる直感や体験ではなくて合理的な認識にもとづく科学性をもたねばならず、とくに人間の認識および論理そのものの自己吟味を含まねばならない。」(栗田・古在編 1981: 160)とされる。これら3つの観点からDaytopの哲学を見ると、一人で悩み抱え込んでいた秘密の問題を仲間と分かち合うことで、問題に関する囚われやしがらみから開放される過程や、他者との関係性を通して自分自身を取り戻し、自己を確立していく回復の過程が示されている点は、回復における①の世界観として捉えることができる。また、自己理解は他者によって深められる点、自分自身の成長は他者の存在によって得られるように、自分自身も他者に成長を促す存在である点は、②の生きた思想や③の自己吟味の観点に当たるのではないかと考えられる。

Daytopの哲学が教示する人間の存在意義、いわゆる人間の本質を問う実存主義の観点は、自分自身を取り戻し、生きていくための回復の核心をついていた。実存主義においては、人間の実存が本質に先立つことを基本命題としていた。PH施設では、上記で示したDaytopの哲学が掲示板に貼られていた。施設によっては、毎日、Daytop哲学を音読してからプログラムを開始するところもあった。

3) 「人」のコンセプト

PHの「人」のコンセプトは、イタロ・カルヴィーノの『見えない街』の一説を抜粋して、セラピスト研修で説明されていた (Lanero 2014)。その説明には図2の写真を見せながら、石造りのアーチ橋は1つひとつの石によって支えられていることが伝えられ、私達の支援はどのように支えられているか考えるように促された。

セラピスト研修では、自らの役割や任務を振り返り、現場での「セラピスト(治療的教育的プログラムや介入を行なう人)」「エドゥケーター(施設で利

用者の日常生活をサポートする人)「ボランティア」「利用者 (PH で支援を受ける依存者本人)」「家族 (依存者の家族)」「仲間 (一緒にアディクション問題に取り組むメンバーまたは戦友)」「友達」などの存在と役割について考えた。それぞれが支え合う活動形態は、人と人が支え合う社会構造であることも認識し、個々人の存在の意義と相互作用の効果を私達は理解した。また、その中で「人」をどう捉え支援にあたるか、その視座についても学びを得られるようになっていた。

PH の支援活動における「人」の捉え方は、「1) 人はできる限り最善を尽くしている、2) 人は改善したいと思っている、3) 人は改善する、試す、チャレンジする必要がある、変化のためには動機が必要である、4) 人は全ての問題の所在が自分自身にあるのではなく、それらの問題に取り組む課題を背負って

いる、5) 人は社会生活上の重要な事項において、新しい行動を学ばなければならない、6) 人に落ち度があるのではなく、セラピーに失敗がある、7) チームは、支え、援助、協働が必要である」(Lanero 2014, 2019)という7点であった。これらは人を支援する上で重要な捉え方であると共に、人の支援には多くの人の支えや力を得ながら実践していることを、セラピスの共通の認識として伝えられていた。

3. 基本原理と活動指針

PH の「人間観」は組織の理念として捉えられ、その「人間観」に基づく基本原理が組織全体で共有されていた。その基本原理とは、1) どのような状態の人であっても全ての人を無条件に尊重、2) 最も不利な立場にいる人達と連帯、3) 治療的教育的プログラムの実施、4) 治療過程での自己受容、5) アディクション問題を持つ全ての人に開かれたプログラム、6) 治療の場や共同生活の場で秩序を乱すいかなる暴力も否定、7) 無宗教、無政党、非営利である (Asociación Proyecto Hombre 2019a)。PH の各支部は、この基本原理に準じた活動指針を定めていた。その活動指針は、独自の文化や運営体制にそった「任務」「展望」「価値」を設定するようになっていた。

例えば、27支部の連合体として存在する PH 協会は、次のように活動指針を定めていた。まず、「任務」として、PH 協会が人間性を尊重したヒューマニズムの観点から構築した PH の共通の使命感と組織への帰属意識を高めることや、PH は組織として国家戦略の一端を担い、国内外の領域において互いに協力し合いながら活動を促進することを表明していた。次に「展望」として、PH が生物心理社会モデルをベースにアディクションや不適応行動の



マルコポーロは橋について、それぞれの石1つずつを語る。クビライカアンが、「一体どの石が橋を支えているんだ。」と尋ねる。「橋は、この石とかあの石とかを支えているのではなく、石が作り出すアーチによって支えられています。」とマルコポーロは答える。クビライカアンは、黙って考える。そして、言う。「どうして石について語るんだ。私にはアーチだけが意味があるのに」ポーロは答える。「石なしではアーチはできないからです。」
イタロ・カルヴィーノの『見えない街』から

図2：石造りのアーチ橋から捉えた「人」のコンセプト

出典：Lanero (2019) 「Proyecto Hombre: una propuesta terapéutica y educativa en el tratamiento e integración social de persona con adicciones」から写真とイタロ・カルヴィーノの『見えない街』の一説を抜粋。『見えない街』の訳は、Kimiyasu-K (2009) 「コモ湖畔の書齋から dalla finestra lariana」から引用

問題へのアプローチを予防、治療、社会復帰、研究の分野で展開させていくことで、人と社会のために支援の質を高め、社会が担う共通のプロジェクトを一丸となって取り組んでいくことや、施設間の連携や活動の拠点を作り上げていくことをしていた。そして「価値」については、ヒューマニズム、透明性、連帯、チームワークとモチベーション、約束、共感と誠実さ、受容する環境、積極的な社会参画、希望、専門性を挙げていた (Asociación Proyecto Hombre 2019b)。これら3つの観点は、PH協会が行なう活動とその方向性になり、それらを具現化する活動が行なわれていた。

PHの基本原理と活動指針に基づく活動は、その活動の原点にある奉仕の精神に支えられていた。PHでは、イタリア人のジャーナリスト Luciano Tavazza のボランティアの定義を採用していた。その定義は、「ボランティアとは、一度、学問、子育て、仕事などの何かをやり遂げた者、または公務員、政治家、労働者などの役を務めた者が連帯しながら、社会に置き去りとなっている課題に対して行動を起こすことである。個人の空いている時間を利用して、自らのエネルギー、能力、時間を提供し、優先的に社会的疎外者に対応し、社会のニーズにクリエイティブに応える。全ての活動は、自ら進んで公益的施設や社会的勢力と協力し合い、奉仕活動を継続する」(Padrón 2014)であった。PH組織全体におけるボランティア数は約2,400人であり、これは被雇用者数の約2倍にあたる。その大半が定年退職した人、子育てが一段落した人であったが、若者も学業や仕事の合間を縫ってボランティア活動に参加するなど、PHの支援活動の現場は非常に風通しの良い交流の場でもあった。PHは様々なバックグラウンドを持つボランティアの人達が連帯し、社会の課題に対して取り組めるように体制を組み、組織が個人々の経験や能力を発揮できるように環境を整えていた。

Ⅲ. PHの組織体制と活動

1. 組織の成長と発展の過程

PHは1984年にスペインの首都マドリッドに第1号が誕生し、現在はスペイン全土に27支部を展開しているが (Presencio 2014)、次のような歴史的発展の過程があった。1986年にPHの定款が作成され、同年にスペイン治療共同体に加盟した。その2年後の1989年にPH協会が設置され、PH協会は国内にあるPH支部の連合体として、全国で行なうプログラムの助成金の申請、国との折衝や国際的ネットワークなどを担う、いわば本部的な機能を持つようになった。1990年には支援者育成のための養成校を設けた。特に実践現場で中心となって支援活動にあたるセラピストに対して、PHの「人間観」を伝承し、専門的な知識や技術、質の高い一貫した支援活動を提供するための研修制度が創られた。1991年からはPH雑誌を発行し、PHの取り組みに関して国内外に発信されるようになり、1993年には公益法人として認められた。PH協会は1998年からは世界治療共同体連盟の理事を務めており、2008年から国連経済社会理事会に特殊諮問資格を持つ組織として参画している (Presencio 2014)。

このような発展は、PHの活動が外部機関から認められ、その活動を後押ししてもらえる資金の獲得があったからである。例えば、PH協会はスペイン中央政府が公募する薬物とアディクション問題に取り組む民間団体を対象にした助成金制度「NGO団体のプログラム：一般会計予算」(Ministerio de Sanidad 2020)を受けている。2011年から2016年までの助成金制度の公募結果を見ても、PH協会の助成金取得金額は最も高かった。2016年度については、助成金出資の総額は310万ユーロ(約3億7,302万円：2016年為替の仲値120.33円/€で換算)であり、69団体が助成金を獲得し、合計114種類のプログラムに助成金が充てられていた。PH協会は17万5,000ユーロ(約2,106万円)獲得し、7種類のプログラムを実施して

いた。

また2015年には、PHは欧州社会基金から社会復帰のための職業訓練事業INSOLAの投資を受けることが決まった（Asociación Proyecto Hombre 2016）。このINSOLAの対象期間は2016年から2020年までの5年間で、投資額の総額は780万ユーロ（約9億3,857万4,000円：2016年為替の仲値120.33円／€で計算）である（Asociación Proyecto Hombre 2018）。その対象施設はPH協会と20支部であり、このINSOLAの事業でより充実した支援活動を行なえる機会を得ていた。

このような功績がある一方で、PHは1997年と1999年の2度に渡り組織分裂の危機に直面していた（Presencio 2014）。1999年はバレンシア支部が離脱し、2013年に再統合するなど、苦難も乗り越えてきていた。その経験も踏まえ、今日のPHの組織体制と構造を築いてきたのである。

2. 組織体制と構造

PHは15自治州において27支部あり、合計210施設を展開している（Asociación Proyecto Hombre 2018）。どの施設においても、PHの「人間観」に基づいた基本原理と活動指針に沿った支援活動が行なわれているが、運営体制については独自の文化や地域のニーズに応じた取り組みになることから独立している。一般的に運営体制は、国や自治州からの全額補助金で賄われている公的補助施設（Centro concertado）か、主に自治州や県からの助成金や補助金を受給している認可施設（Centro acreditado）である。後者は、支部で実施しているプログラムの一部や利用者数の何割かに当てられた助成金や補助金であるため、支部ごとに運営費となる公的資金の割合が異なっていた。そのため、PH協会は各支部の運営体制が多様であることを考慮しながら、組織としての連帯性や支援活動の質を保持できるように体制を組んでいた。

PHの組織体制は図3の通りである。その体制について概略的に説明すると、総会とは、支部長レベ

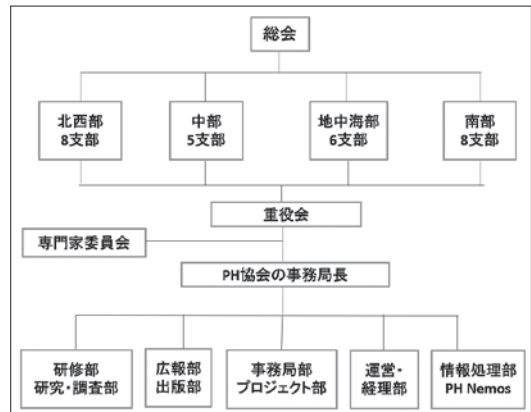


図3：PHの組織図

出典：2014年9月30日のセラピスト研修の資料 Presencio (2014) を参考に、筆者が図を作成し日本語訳。その際、バレンシア支部が2013年10月に再統合されたので、地中海部に加え、5支部から6支部に変更している。

ルの会議になり、27支部のディレクターが参加する全体会議であった。地区ごとの会議とは、北西部は8支部、中部は5支部、地中海部は6支部、南部は8支部に分かれて会議が行なわれており、グラナダ支部は南部に所属していた。重役会とは、27名のディレクターのうち組織内で選抜された6名²⁾で構成された会議であり、この会議ではPH全体の取り組みやイベントなど、重要な取り決めなどが議論され決定されていた。現場をよく知るディレクターが組織の改善や質の担保を図るなど、重役会はPH組織の基柱であり独特であった。

専門家委員会とは、2017年において予防委員会、養成委員会、戦略計画委員会、評価委員会、ボランティア委員会、国際委員会、働く人のメンタルヘルス委員会、広報委員会の計8種類の委員会が存在した（Asociación Proyecto Hombre 2018）。予防委員会は教育機関で使用する教材を作成または見直しを主に行ない、養成委員会はPHで働くセラピストや支援者を対象にした研修内容を立案したり、セラピスト研修に関しては2016年9月からオビエド大学と協同で「アディクション修士課程：生物心理社会的観点から（Máster en Adicciones: una Perspectiva Biopsicosocial）」を実施していた。この養成委員会は、

PH協会内にある「研修部、研究・調査部」の活動と重なる部分があったことから、2018年11月に統合され閉鎖された。戦略計画委員会、はスペイン政府が出す薬物に関する国家戦略と行動計画に沿った活動を行なうため、PH独自の戦略や行動計画を立てていた。評価委員会は、主に各支部で行なわれている成人対象の治療プログラムを受けた利用者からとった嗜癮重症度指標EuropASI (European Addiction Severity Index) のデータを分析し、その報告書を1年ごとに作成していた。ボランティア委員会は、ボランティアの人を対象にしたワークショップやイベントを企画し実施していた。国際委員会は、世界治療共同体やヨーロッパ治療共同体などの連盟の役員としての務めや、ラテンアメリカ治療共同体連盟との協定に基づいた活動を行っていた。働く人のメンタルヘルス委員会は、企業等においてアルコール、薬物、たばこなどの薬理作用や過剰摂取による害などを含めたメンタルヘルスを中心とした予防啓発プログラムの検討とその実施方法を検討していた。広報委員会は、PHの活動やイベントなどの情報を、一般市民をはじめ外部機関に広く伝達する方法や手段を検討していた。これら8つの委員会は5～9名のメンバーで編成されており、外部の研究員3名以外はPHの被雇用者から選抜された者であった³⁾。彼らは現場で支援をしながら、PH全体での活動やプログラムなどの促進や改革を進める専門家として業務にあたっていた。専門家委員会のメンバーは、組織を改革する推進力となっていた。

PH協会の事務局長は、重役会での決定事項を遂行する任務があり、PH協会内にある「研修部、研究・調査部」「広報部、出版部」「事務局、プロジェクト部」「運営・経理部」「情報処理部 PN Nemos」の部署に業務を振り分け履行する役割があった。これまで大学なども協働し、教育機関で実施している予防プログラムの評価と開発 (Comisión de Prevención Proyecto Hombre 2013, 2017, 2018など)、働く人のメンタルヘルスに関するプロトコル (Comisión de Intervención Laboral. Proyecto

Hombre 2011)、治療プログラムの評価 (Fernández Hermida and Secades Villa R. 2001; Menéndez Gómez and García 2004; Pérez del Río 2011; Comisión de Evaluación. Proyecto Hombre) と家族支援の評価 (Comisión de Evaluación. Proyecto Hombre 2009a, 2010)、刑務所内外の受刑者のリハビリテーション・プログラムの評価 (Comisión de Evaluación. Proyecto Hombre 2011)、治療プログラムの評価実践ガイド (Comisión de Evaluación. Proyecto Hombre 2009b)、利用者の特徴に関する調査報告書 (Comisión de Evaluación. Proyecto Hombre 2013, 2014, 2015, 2016, 2017, 2018) などを刊行している。

PHは組織全体で活動の質の担保、改革、連帯性などを図る仕組みがあった。その特徴は閉鎖的な縦割り業務ではなく、他部門が協働して横断的に業務を遂行するところであった。これはPHの共同体のあり方であり、PHグラナダ支部でも同様の業務遂行のあり方があった。連携会議やチーム会議などの時間を確保し、会議に惜しみなく時間を割いていた。例えば、プログラムごとのチーム会議は、一日の業務や申し送りもかねて毎日約1時間の枠で実施され、利用者に関するケース会議は週に1回約1時間半～2時間の枠で行なわれていた。会議時間は延長されることも多々あった。利用者への支援業務と同様、もしかするとそれ以上に支援者間の対話を大事にし、チーム体制を整えていた。この支え合う共同体づくりは、PH以外の施設とも行なわれていた。

3. 国内外での連携とネットワーク

PH協会が連携する組織や機関は、スペイン国内だけでなく国外にも及ぶ。国内では、PHは全国社会的参画活動運営協会の理事会に参加し、薬物とアディクションに関するNGO団体中核組織の理事会の議長団として常任している。その他、刑事施設処遇環境に関する社会組織ネットワーク、全国刑事施設社会理事会、財団法人スペイン協会、ボランティア中核組織と連携をとっている (Asociación

表1 治療プログラムの種類別にみた利用者数と修了者数

プログラムの種類	特徴・形態	利用者数	修了者数
①ベーシック治療共同体プログラム	一般的に長期間の薬物使用により心身ともに影響が出ており、また社会的・職業的活動について困難度合いが高い人を対象。プログラムの形態は、治療共同体を中核にした入所型プログラムに、社会復帰段階の通所型プログラムを組み合わせた混合型プログラムが主流（以下、TC混合型と省略する）	5,157人	953人
②通所プログラム	仕事を持ち、家族からの支援がある人を対象にした通所型のプログラムで、労働時間に配慮した時間設定。主たる依存物質がコカインである利用者が多く、通称コカインプログラムとも呼ばれている	3,882人	661人
③アルコールプログラム	年齢層の高い人を対象にしたプログラム。主たる依存物質がアルコールの場合、利用者の年齢層が高い特徴を鑑みて、設けられたプログラム。その形態は、TC混合型または通所型のプログラムになる	723人	146人
④併存障害(重複障害)を対象にしたプログラム	依存問題と何らかの精神疾患を持っている人を対象。依存からの回復を目的としたTCの入所型プログラムまたは通所型プログラムのほか、生活リズムを築くことを目的としたデイケアがある	820人	77人
⑤行動依存を対象にしたプログラム	ギャンブルをはじめ、スマートフォンやタブレット端末などの情報通信機器を使用した行動依存を対象。 基本的に行動依存者も、物質依存者を対象にしたプログラムと同様に状態別対応。支部にもよるが、利用者が依存する主たる物質または行動別のグループセッションなどを実施	情報通信機器：73人	13人
		ギャンブル：239人	34人
		その他：197人	16人
⑥その他のプログラム	健康被害やリスクをもたらす行動習慣に対して害の減少を図るハームリダクションプログラム、実生活に影響を及ぼしている問題に重点的に取り組むためのプログラム、女性や18歳未満の未成年に特化したTCプログラムなど。プログラムの形態は、入所型、通所型、TC混合型になる	4,016人	440人
⑦思春期・若者プログラム	基本的に対象年齢は14～20歳であるが、人としての青さや未熟さゆえの問題である場合は20歳前半の者も対象。プログラムの形態は、TC混合型、通所型になる	1,898人	366人
⑧刑務所内プログラム	依存問題がもたらした事態と向き合い、回復と更生の機会を与える。また、出所後を見据えた生活プランを立てる。プログラムの形態は、刑務所内TC、またはグループワークになる	1,832	403人
合計		18,788人	2,898人

注1) 治療共同体は、英語で Therapeutic Community と書き、表1の特徴・形態の項目でもTCと省略する

注2) 社会復帰段階のプログラムでは、入所型から通所型のプログラムへと切り替わる。利用者の状態によっては段階的に切り替えていく場合もあるが、この段階のプログラムの目的は利用者が地域社会の中で定着し生活を営むことであり、基本的に通所になる

注3) 治療プログラムの利用者数の合計は18,788人、修了者数の合計は2,898人であったと原本には記されているが、各プログラムの利用者数ならびに修了者数を加算すると利用者数は18,837人、修了者数は3,109人になる。誤差はあるが、表には原本にある各々の合計者数を記している

出典：PH協会の年次報告書『Memoria Anual 2017』のp.22-23にある表「Tabla 1. Resultados terapéuticos 2017 de personas en tratamiento por programas」のデータを基に筆者が表を作成。表にある特徴・形態の欄は、筆者が調査で得た情報を加筆

Proyecto Hombre 2019c)。

国外では、世界治療共同体連盟、ヨーロッパ治療共同体連盟、ウィーン NGO 委員会、教育におけるヨーロッパ・チャンピオンシップ:「旅でトレーニング」、薬物依存問題に取り組む NGO 団体イベロアメリカネットワークと連携をとっている。PH はラテンアメリカ治療共同体連盟とは協力協定を結び、世界治療共同体連盟では役員を務めている。国連経済社会理事会においては特殊諮問資格を持つことから、依存者の支援に関して提言を行なうなど (Asociación Proyecto Hombre 2019c)、国際的なレベルにおいても活躍している。

PH は組織の理念に基づいて、社会全体でアディクション問題に取り組んでいることから、国内外の組織や機関と連携し、共に事業を展開することも重視していた。このような事業展開を進める中で、PH はより多角的な視点を獲得ことができ、様々なプログラムをデザインすることができたのではないかと、活動状況から読み取れた。

4. 活動の状況—年次報告書2017年版から—

PH の活動は、予防、治療、社会復帰の3つの軸で行なわれている (Asociación Proyecto Hombre 2019a)。予防とは、一般市民をはじめ、教育機関での児童、生徒、学生などに対してアディクションに関する基礎知識を提供する「予防啓発活動 (Prevention awareness)」のことである。治療とは、依存者本人とその家族に寄り添い、アディクション問題に左右された生活から人生の主導権を自分自身に取り戻し、何かに依存することに縛られない生活再建を計ることを目的とした「治療 (Treatment)」に、依存する物質や行動による害の低減や生活状況の改善などを意図したハームリダクションの観点を交えた「リハビリテーション (Rehabilitation)」を加えたものである。社会復帰とは、仕事に就くことだけを指すのではなく、地域での生活を定着させていく「社会的労働的な復帰 (Socio-labour reintegration)」のことである。

PH 協会の年次報告書『Memoria Anual 2017』 (Asociación Proyecto Hombre 2018)によると、2017年1月1日から12月31日までの間、PH 全体でアディクション問題を持つ1万8,788人 (男性83%、女性17%) が何らかのプログラムを利用した。そのうち新規利用者は1万5,428人 (男性84%、女性16%) であった。PH の被雇用者は1,120人 (男性38%、女性62%)、ボランティアは2,403人 (男性37%、女性63%) であった。

予防の領域では、児童・生徒、親、先生を対象にした教育機関で実施された予防教育プログラムに8万3,041人が参加し、働く人のメンタルヘルスプログラムには4,371人が参加した。

治療の領域におけるプログラムの種類別の利用者数は、表1に示す通りである。8種類のプログラムへの参加者数は1万8,788人であり、そのうちプログラム修了者数は2,898人であった。PH では利用者の家族のサポートも行なっているため、各プログラムで対応する実際の人数は約倍の数になる。

社会復帰の領域におけるプログラムの利用者数については、治療プログラムの構成上、基本的に「社会復帰」の段階を含めた提供になっており、社会復帰のプログラムの利用者だけの集計結果は見当たらない。しかし、社会復帰の領域で提供された職業訓練プログラムの参加者数4,371人、社会的労働的な復帰を意図した INSOLA のプロジェクトの参加者数は2,093人であった。

このように PH では3つの活動の軸を持って、アディクション問題に幅広く取り組むことができていくが課題もある。例えば、治療プログラムにつながった人達の約3分の2が動機づけの段階で脱落していた。今日では向精神薬を服用している併存障害者が増加傾向にあることから、脱落者と併存障害者の因果関係も含め検証し改善を図る必要がある。また、利用者全体の女性の割合は約2割であり、子どもと暮らす割合が男性より女性の方がはるかに高い状況であった。男女別に見た利用者数や特徴の差異は、固定的な性別役割分担意識や社会成層化による影響が

関係していると考えられており、利用者の状態や生活状況に応じたよりきめ細やかな支援や特化したプログラムをデザインしていく必要がある。今後も組織的に活動の改善が図られていくことだろう。

IV. 考察

PHの取り組みは、PHを創設した先駆者らがモデルにしたTCからPHの「人間観」を形どる要素や共同体のコンセプトを得ていた。PHの「人間観」は、セラピスト研修の理論編において、PHの「人間観」を歴史的背景から学び、現場での実践を通して深められるようになっており、これは支援上のスキル、理論、モデルを習得する前提とされるぐらい重要な観点であった。「人間観」にある個人の人々の存在意義と価値は、セラピスト、エドゥケーター、ボランティア、利用者、家族などPHに関わる全ての人々が持つ財産であり、それを共有することが大事であると考えられていた。このように先駆者の思いを含むPHの「人間観」が受け継がれるように、セラピストは研修を通じて養成され、人との関わりや対話を通して社会の変革を担う者として活動するようになっていた。

PHは、常に社会的に弱い立場の人達に寄り添い、彼らの状態や環境をよりよく変えていく取り組みを、奉仕の精神から行っていた。これは“私達”が暮らす地域をよりよく変えていく活動でもあり、あらゆる人の手を借りながら誰もが住みやすい共生社会を築く活動であったことから、まさにソーシャルワークの原理と専門職の責務に基づく実践であった。その実践では、地域にある施設等機関と連携するだけでなく、ボランティアや実習生などを積極的に受け入れ、多くの人達にPHの活動の趣旨を知ってもらい、地域に根ざした支援活動を共に行っていた。PH組織全体のボランティア数を見ても2,403名存在し、その数はPHの被雇用者の約2倍に匹敵し、豊かな人的資源による社会的活動が行なわれていることがデータからも明らかであった。

PHが手掛ける共同体では、「Pide lo que necesites (あなたに必要なことがあれば言ってね)」というフレーズが合言葉のように交わされており、筆者も困った時は相談に乗ってもらった。どのような相談に対しても真摯に対応してもらった経験を幾度となくしてきた。人の思いや優しさに触れる場では、恩を受けた相手が誰かに恩を返すといった恩送りの循環が築かれており、これがPHの支え合う共同体の文化である。PHは、人との関係において生じる付加価値を活動の原動力としており、個人が自ら備わった使命や役割について探求できる共同体を持っていた。また、PHにおいて「Los trabajos pagan facturas, pero no compran el corazón ni las almas de las personas. (仕事は請求できるが、人の心と魂は買えない)」という教えを受けたように、人の心と魂はお金に代えられない価値があり、互いの心を通わず支援を経験することが大事にされていた。その心を通わず支援の探求に加え内省こそが、組織に進化をもたらす要因で、PHの「人間観」にある生きた思想や自己吟味が関連していたと考えられる。その実践の結果、TCを用いた「ベーシック治療共同体プログラム」以外に、予防、治療、社会復帰の領域において様々なプログラムがデザインされ、今日ではPH27支部において年間約1万9,000人の依存者が治療プログラムを受け、年間約8万人の市民が予防プログラムを受ける状況にまで発展したのである。

PHが様々なプログラムを提供できるのは、対外的に国との折衝や組織全体での取り組みを行なうPH協会の機能もさることながら、現場の声が反映し易い組織体制や構造にある。まさに組織での対話と連携が円滑に機能する組織の共同体に秘訣があった。PHが持つ連帯性やインタラクティブの形は、PHが手掛ける共同体のあり方であったからできたのである。スペインでは、地方ごとに異なる文化や風習などがあり、PH支部ごとに独立した運営形態を持っていたが、互いに尊重し助け合う体制を築いてきた。この協働性や多様性を育む土壌づくりの範を、組織をはじめ各々の支部が築いてきたのではな

いかと考えることができた。筆者が実習したどの現場でも、異なる立場や職種の人達が互いに尊重しながら、アディクション問題と一緒に取り組む土壌を創っていた。個人々がロールモデルになるように、支援活動においては共同体を築く担い手が地域を築く担い手になることを意識した行動がとられていた。

TCの基盤となる共同体は、アディクション問題を持つ人達が回復するための共同体、支援活動を支える組織の共同体、人が暮らす地域における共同体などに共通した要素であり、それらは相互に影響し合う連続性のある要素でもあった。その連続性には、図4のようにPHの「人間観」を軸にした支援活動の基盤や仕組みがあり、個人が有する力や資源を活かした自立・自律のための「自助」を促し、地域での助け合いや支え合いにつながるように「互助」の営みを作り、連携や協働する施設等機関が補完し合った「共助」の活動を進め、行政などから助成金や補助金などの「公助」の支えを得ながら社会事業を展開する活動の形を築いていた。地域ひいては社会全体でアディクション問題を持つ人達への支援活動には、社会的相互作用を意図したPHの任務、展望、価値に基づいた活動が重要であり、その活動には日本の全国社会福祉法人経営者協議会(2016)が示すように公益性、継続性、透明性、倫理性、非営利性、開拓性、組織性、主体性、効率性、機動性といった10の経営原則に基づく実践を行ないながら、いかに対外的に信頼関係を築いていけるかが要であった。それは、共同体づくりの本質であった。

このように本論文では、PHの共同体は組織の軸となる「人間観」に基づく取り組みであることを考察してきた。さらに、De Leonが示す共同体に関する9つの基本的なコンセプト「1. 参加者としての役割、2. メンバーシップとフィードバック、3. ロールモデルとしてのメンバーシップ、4. 個々の変化を導く集団、5. 共有した規範と価値、6. 構造とシステム、7. 開かれたコミュニケーション、8. 人との関係性、

9. 独自の用語」(De Leon 1995)を用いてPHの共同体を考察してみると、PHには「人間観」という共有した規範と価値があり、それに基づく支援活動に一人ひとりが参加者としての役割や使命感を持って取り組んでいた。個人々が「人間観」を体現するロールモデルとしてのメンバーシップを発揮していたと考えられる。また、アディクション問題に取り組む同士が集う集団においてメンバーシップとフィードバックが行なわれ、長期に渡る持続可能かつ発展的な支援活動の体制を築いてきたのだと考えられる。その体制にあるPHの構造とシステムは、横断的で開かれたコミュニケーションによる業務遂行と多様性を尊重した組織を築いていた。また、人との関係性を活かした社会的ネットワークは、個々の変化を導く集団として機能し、集団がもたらす文化があると考えられた。PHに関わる誰もが一人の人間

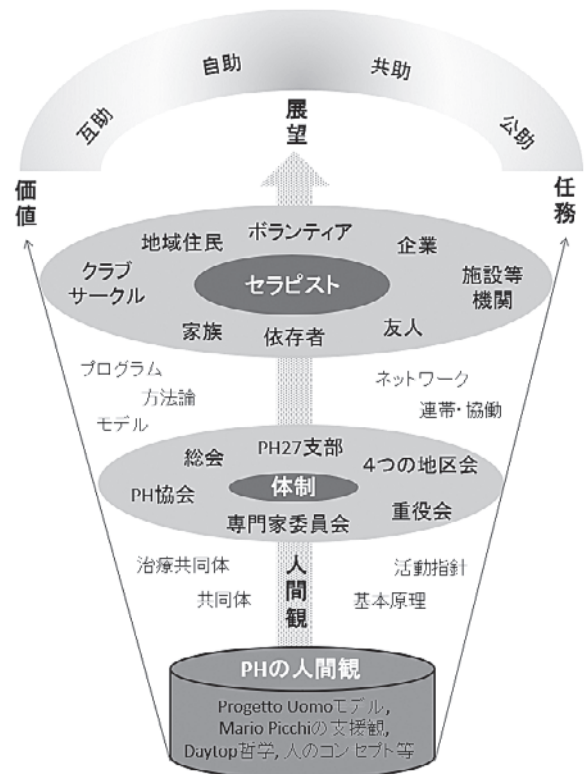


図4 PHの「人間観」に基づく支援活動
筆者が図を作成

として人と向き合い、自らの経験を活かした助け合いを行なうなど、現在社会で希薄化しつつある人との関係性から生まれる普遍的な価値を体感できる共同体の文化があるので、この文化は今後も現在社会のコミュニティに影響を与えると考えられる。このような共同体の価値を共有する場での生成的な話し合いや対話は、**独自の用語**を生み出すようなサブカルチャーを創り、誰もが生きやすい共生社会を創出することにつながると思える。PHの支え合う共同体を参考に、私達それぞれが属するコミュニティや職場などで共同体づくりから取り掛かることができると考える。その土壌を耕していく個人々の行動が、包摂する社会につながると考えられる。

最後に、本論文において日本がPHの取り組みから参考にできるところを提言すると、①援助職者は人間の本質や実存を捉えた人間観を持って支援にあたること。それを実現するために、②支援者研修を設けること。そして、③組織の意思決定は現場の事情をよく知る人達によって行なわれること。その人達による④組織の決定事項は、他部門が協働しながら横断的に業務を遂行すること。その業務を円滑に進めるために、⑤連携会議やチーム会議には惜しみなく時間を割き、日頃から協働し合う関係を築くことである。これら5つの提言は、社会的課題の解決に向けた取り組みを行なうために重要である。日本でも援助職者同士が対話を重ねながら支援の方向性や信頼関係を築いていき、最終的には自分達の共同体づくりが地域づくりに発展するよう努めていきたいと筆者は考えている。

本研究の限界

本研究では、PHの共同体が持つ理念と組織体制からPHの取り組みを検証した。PHでは「人間観」を根幹とした共同体や組織体制が築かれていることを明らかにしたが、実践現場での参与観察を通して共同体を築く要素を精緻化し、それらが与える影響について検証することはできていない。また、日本とスペインでは社会保障制度や司法制度などの違い

があるが、その違いを踏まえて日本に見合った支援活動のあり方について検討することができておらず、今後の課題である。

おわりに

PHの成り立ちを歴史的背景から見ていくと、TCが鍵となっていた。国を超えてTCを手掛ける支援者同士が助け合い、施設にTCを導入するサポートをしていたことから、TCというバトンの中には、人とのボーダレスな絆や社会を築く価値観があり、それを共有し築いているように見て取れた。TCの基盤となる共同体は、依存者が人間性の回復をするために必要な場であり、誰も排除されない包摂的な観点が欠かせない場であったからである。アディクション問題を持つ人達の回復のための場となる「共同体 (Comunity)」づくりは、社会における「コミュニティ (Community)」づくりにつながることから、自分が属する共同体のあり様を問うことが大切にされていた。この「コミュニティ」の担い手を育てる「共同体」に魅力を感じる人が日本でも増え、TCが注目されるようになったのではないかと筆者は見ている。日本でTCを展開していくことは、TCの基本要素である共同体を手掛けていく実践でもあるので、それは依存者の回復の場となる土壌づくりだけでなく、最終的に誰もが住みやすい地域社会づくりにつながると思える。

謝辞

本研究は、立命館大学大学院博士課程後期課程国際的研究活動促進研究費を受けたものです。本研究を実施するにあたり、PHグラナダ支部が筆者を受け入れ、調査を遂行できるようにサポートして下さいました。PH協会についても、筆者がセラピスト研修を受講することに快く承諾して下さい、PHの支援活動の理解が深まるように様々な資料や文献などを無償で提供して下さいました。この間の調査と実践において、ご指導およびサポートをして下さった方々に深謝いたします。

注

- 1) 筆者がセラピスト研修を受けた当時、研修対象者はPHで支援活動を行なう者に限られていたことから、2014年3月に現地で個別に交渉し受講の承諾を得る手続きをとった。しかし、この研修は2016年からはオビエド大学の修士課程に位置づけられ、外部に開かれた状況である。今日では学位取得の条件に伴い、履修科目の内容や時間数に部分的に変更があるものの、筆者が受けた理論編の研修内容は概ね変わりにくく提供されていると、PH協会の研修センター長 Granero 氏から伺っている。
- 2) 重役会のメンバー数について、報告書には記載がなかったため、PH協会にメールで問い合わせを行なった。2019年2月19日付の返信メールにて、重役会のメンバーは6名であることを確認した。
- 3) PH協会の年次報告書2017年版『Memoria Anual 2017』には8種類の委員会について触れられているが、各委員会のメンバー数についての記載はなかった。PH協会にメールで問い合わせを行ない、2019年2月19日と2月21日付けの返信メールで回答を得た。そのメールには、養成委員会が2018年11月8日に閉鎖され、PH協会内にある「研修部、研究・調査部」に統合されたことが記されていた。統合に至った理由は、双方の部署の業務内容に重複する部分があったからとのことであった。それも含めて、本稿に反映した。

引用文献・ウェブサイト

- Asociación Proyecto Hombre, 2016, "Proyecto Hombre y el Proyecto INSOLA", Asociación Proyecto Hombre Blog, July 25, 2016, (2020年7月10日最終閲覧日: <http://archivo.proyctohombre.es/blog/blog-proyecto-insola/>)
- Asociación Proyecto Hombre, 2018, *Memoria Anual 2017*, Asociación Proyecto Hombre, Madrid: Afanias.
- Asociación Proyecto Hombre and Kethea, 2019, *Relation Between Family History of Substance Use, Co-occurring Mental Health Disorders, History of Emotional, Physical or Sexual Abuse and Adversities, and Treatment Responses and Outcome: Implication for Public Health and Drug Policies*, Vienna. (2019年6月17日取得: <http://archivo.proyctohombre.es/wp-content/uploads/2019/03/Study-about-Therapeutic-Communities-Proyecto-Hombre-Kethea.pdf>)
- Asociación Proyecto Hombre, 2019a, "Qué es Proyecto Hombre", Asociación Proyecto Hombre Homepage (2019年2月19日最終閲覧日: <http://proyctohombre.es/proyecto-hombre/>)
- Asociación Proyecto Hombre, 2019b, "Misión, Visión Valores", Asociación Proyecto Hombre Homepage (2019年2月13日最終閲覧日: <http://proyctohombre.es/mision-vision-valores/>)
- Asociación Proyecto Hombre, 2019c, "Redes Nacional e Internacionales", Asociación Proyecto Hombre Homepage (2019年2月13日最終閲覧日: <http://proyctohombre.es/redes-nacionales-e-internacionales/>)
- 粟田賢三, 古在由重編, 1981, 『岩波哲学小辞典』岩波書店.
- 治療共同体研究会, 2017, 『依存症者のためのエンパワメント・プログラム』<ワーク集とファシリテーションガイドのセット>, 株式会社ウィザップ.
- 治療共同体ネットワーク, 2021, (2021年6月10日最終閲覧日: <https://www.tc-net.info/>)
- Comas Arnau D., 2006, *Comunidades Terapéuticas en España: Situación Actual y Propuesta Funcional*, Madrid: Atenea.
- Comisión de Evaluación. Proyecto Hombre, 2009a, *Evaluación del Diseño del Trabajo con Familias en los Centros de Tratamiento de Proyecto Hombre*, Asociación Proyecto Hombre, Madrid.
- Comisión de Evaluación. Proyecto Hombre, 2009b, *Guía de Evaluación de Programas de Tratamiento de Adicciones*, Asociación Proyecto Hombre, Madrid: Afanias Industrias Gráficas.
- Comisión de Evaluación. Proyecto Hombre, 2010, *Informe de Evaluación del trabajo con familias en los programas de intervención de Proyecto Hombre*, Asociación Proyecto Hombre, Madrid.
- Comisión de Evaluación. Proyecto Hombre, 2011, *Evaluación de los Programas de Rehabilitación de la Asociación Proyecto Hombre con pacientes*

- internos en prisiones y con pacientes en cumplimiento extrapenitenciario*, Asociación Proyecto Hombre, Madrid.
- Comisión de Evaluación. Proyecto Hombre, 2013, *Observatorio Proyecto Hombre: sobre el Perfil del Drogodependiente*, Asociación Proyecto Hombre, Madrid: Afanías.
- Comisión de Evaluación. Proyecto Hombre, 2014, 2015, 2016, 2017, 2018, *Observatorio Proyecto Hombre: sobre el Perfil de las personas con problemas de adicción en tratamiento*, Asociación Proyecto Hombre, Madrid: Afanías.
- Comisión de Intervención Laboral. Proyecto Hombre, 2011, *Prevención del Consumo de Sustancias Adictivas en el Ámbito laboral: Alcohol y otras Drogas. Protocolo de Elaboración de Planes de Prevención en las Empresas*, Asociación Proyecto Hombre, Madrid.
- Comisión de Prevención. Proyecto Hombre, 2013, *Juego de llave: Programa de Prevención Escolar y Familiar “Entre Todos” de la Asociación Proyecto Hombre*, Asociación Proyecto Hombre, Madrid.
- Comisión de Prevención. Proyecto Hombre, 2017, *Rompecabezas: Programa de Prevención Selectiva*, Asociación Proyecto Hombre, Madrid.
- Comisión de Prevención. Proyecto Hombre, 2018, *Informe de Evaluación del Programa de Prevención Escolar y Familiar: Juego de llaves*, Asociación Proyecto Hombre, Madrid.
- De Leon G., 1995, “Therapeutic Communities for Addictions: A Theoretical Framework”, *The International Journal of the Addictions*, 30 (20) : 1603-1645.
- De Leon G., 2000, *The Therapeutic Community. Theory, Model, and Method*, New York: Springer Publishing Company (=2004, Calleja Garate G. trans., *La Comunidad Terapéutica y las Adicciones*, Bilbao: DESCLÉE DE BROUWER.
- Fernández Hermida J.R. and Secades Villa R., 2001, *Evaluación de la Eficacia del Programa: Proyecto Hombre*, Asociación Proyecto Hombre, Madrid.
- Madrid.
- 藤岡淳子, 2019, 「第1章 [総論] 対人援助のための治療共同体」藤岡淳子編『治療共同体実践ガイド』金剛出版.
- 藤岡淳子編, 2019, 『治療共同体実践ガイド』金剛出版.
- Gamella, J.F., 2014, “Heroína en España, 1977-1996. Balance de una Crisis de Drogas”, *ReserachGate*.
- 引土絵未, 2010, 「治療共同体 Amity の援助システムについての質的分析：共同体内の多様な役割間のグループダイナミクスに着目して」『社会福祉学』日本社会福祉学会, 50(4): 69-81.
- 引土絵未, 岡崎重人, 加藤隆, 山本大, 山崎明義, 松本俊彦, 2018, 「治療共同体エンカウンター・グループの効果とその要因について」『日本アルコール・薬物医学会雑誌』日本アルコール・アディクション医学会, 53(2): 83-94.
- 引土絵未, 岡崎重人, 加藤隆, 山本大, 山崎明義, 2019, 「民間支援団体における回復プログラムおよびその効果に関する研究」『平成30年度厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「薬物乱用・依存状態等のモニタリング調査と薬物依存者・家族に対する回復支援に関する研究（研究代表者：嶋根卓也）」分担研究報告書：265-276.
- 井上智恵, 2014, 「スペインのプロジェクト・オンブレが支援する薬物依存者のプロフィール：『2012年度プロジェクト・オンブレ研究所報告』から」『立命館産業社会論集』立命館大学産業社会学会, 50(2): 147-161.
- 井上智恵, 近藤京子, 2016, 「スペインにおけるアルコール・薬物依存者の特徴：『2014年度プロジェクト・オンブレ研究所報告』より」『日本アルコール・薬物医学会』日本アルコール・アディクション医学会, 51(3): 241-248.
- Kimiyasu-K, 2009, 「コモ湖畔の書齋から dalla finestra lariana」Excite Blog, August 14, 2009, (2019年4月5日最終閲覧日：https://kimiyasu.exblog.jp/10097434/)
- 近藤京子, 2017, 「人に焦点を当てる：プロジェクト・オンブレの取り組みを中心に」『アディクションと家族』日本嗜癮行動学会, 33(1): 10-12.
- 近藤京子, 2018, 「スペインの薬物政策：「人」に焦点

- を当てるスペインのプロジェクト・オンブレ』『龍谷法学』龍谷大学法学会, 50(3): 1035-1055.
- 厚生労働省社会・援護局, 2017,『依存症対策全国拠点機関設置運営事業の実施について』(2021年3月2日最終閲覧日: https://h-crisis.niph.go.jp/wp-content/uploads/2017/06/20170616131302_file_05-Shingikai-12205250-Shakaiengokuyokushougaihokenfukushibu-Kokoronokenkoushienshitsu_04_1.pdf)
- Lanero. P. P., 2014, “Etapa de crecimiento”, 2014年11月17 - 18日のPHセラピスト研修の資料, 講義内容.
- Lanero. P. P., 2019, “Proyecto Hombre: una propuesta terapéutica y educativa en el tratamiento e integración social de persona con adicciones” (= プロジェクト・オンブレ・ジャパン設立準備委員会 trans., 「<プロジェクト・オンブレ>アディクション問題を持つ人のトリートメントと社会統合における治療—教育的提案」, 2019年1月25日に慶應義塾大学日吉キャンパスで開催された「『いきる力』を引き出す! スペインのプログラム」の配布資料)
- Menéndez Gómez J.C. and García A.R., 2004, *Drogodependencias y Justicia: Evaluación del Tratamiento de Drogodependientes con causas penales en Proyecto Hombre de Asturias*, Fundación C.E.S.P.A., Asturias: Gráficas Oviedo.
- Ministerio de Sanidad, 2020, “Programas de ONG: Presupuestos Generales del Estado”, Delagación del Gobierno para el Plan Nacional sobre Drogas (2020年7月10日最終閲覧日: https://pnsd.sanidad.gob.es/delegacionGobiernoPNSD/convocatoriaSubvenciones/ongs/ProgramaONGs_PGE.htm)
- 毛利真弓, 2018, 『日本の刑務所における治療共同体の可能性—犯罪からの回復を支える「共同体」と「関係性」の構築に関する現状と課題—』大阪大学大学院博士課程人間科学研究科博士論文.
- 内閣府, 2011, 『スペインにおける青少年の薬物乱用対策に関する企画分析報告書』内閣府政策統括官(共生社会政策担当) 付青少年環境整備担当.
- 日本集団精神療学会, 2020, 『治療共同体・再訪—考え続けるコミュニティ—』日本集団精神療学会第37回学術大会 大会事務局. ※これは『集団精神療法』の第36巻2号の別刷である.
- Padrón M., 2014, “Clase de Voluntariado 2014, CFBT PROYECTO HOMBRE”, 2014年9月30日のPHセラピスト研修資料.
- Pérez del Río F., 2011, *Estudios sobre Adicciones: Perfiles de Drogodependientes y Eficacia del Tratamiento en Proyecto Hombre Burgos*, Publicaciones de la Excma. Diputación Provincial de Burgos, Burgos: Imprenta Provincial.
- Picchi Mario, 出版年不明, “Un proyecto para el hombre”,
※1985年に出版された Picchi Mario の『Progetto Uomo: un programma terapeutico per tossicodipendenti』はイタリア語の本で廃版になっていた。その原本をスペイン語に翻訳された資料が存在し、マドリードにあるコンプルテンセ大学の教員で、PH協会の外部研究員である Molina Fernández A. J. から2014年11月25日付のメールにて入手した.
- Presencio Elena, 2014, “La Asociación: historia y funcionamiento”, 2014年9月30日のPHセラピスト研修資料.
- プロジェクト・オンブレ・ジャパン設立準備委員会 (現在は一般社団法人オンブレ・ジャパン), 2019, 「『いきる力』を引き出す! スペインのプログラム」, スペインの Proyecto Hombre のセラピスト2名による来日公演・ワークショップ, (2021年6月7日最終閲覧日: <https://ph-precomision.wixsite.com/hombre>)
- Sabatés A., 2014a, “Raíces de Proyecto Hombre y Movimiento de las Comunidades Terapéuticas, Ejes filosóficos”, 2014年9月29日のPHセラピスト研修資料.
- Sabatés A., 2014b, “Proyecto Hombre: Historia y Movimiento de las Comunidades Terapéuticas”, 2014年9月29日のPHセラピスト研修資料.
- 坂上香監督, 2019, 『プリズン・サークル』東風 (この映画に関するウェブサイト: <https://prison-circle.com/>)
- 下中邦彦編, 1982, 『哲学事典』平凡社.

United Nations Economic and Social Council (UNESCO), 2018, "Statement Submitted by the Association Proyecto Hombre", *Commission on Narcotic Drugs Sixty - first Session , Vienna, 12-16 March, 2018*.

White William L. 1998, *SLAYING THE DRAGON: The History of Addiction Treatment and Recovery in America*, Chestnut Health System (=ホワイト ウィリアム L., 2007, 鈴木美保子, 山本幸枝, 麻生克郎, 岡崎直人 trans., 『米国アディクション列伝, Slaying the Dragon (スレイング・ザ・ドラゴン): アメリカにおけるアディクション

治療と回復の歴史』特定非営利活動法人ジャパンマック, 大和印刷)

全国社会福祉法人経営者協議会, 2016, 『社会福祉法人アクションプラン2020:平成28年度～平成32年度中期行動計画』(2019年7月20日取得: <https://www.keieikyo.com/data/ap2020.pdf>)

全国薬物依存症者家族連合会, 2009, 『スペインの治療共同体:プロジェクト・オンブレ研修報告』ファイザープログラム2008年度新規助成「薬物使用を抱える家族への介入・援助プログラムに関する治療共同体研究」の報告書.

The Efforts of Proyecto Hombre - an Addiction Rehabilitation
and Support Center in Spain:
Focus on the Community Based on its Organizational Philosophy and Structure

INOUE Chieⁱ

Abstract : The aim of this study is to consider how the community based on the philosophy of Proyecto Hombre, both in its present-day and historical context, which is developed from grass roots field-based experience, feeds back into the groundwork structure and practice.

Proyecto Hombre was launched in the capital of Spain, Madrid, in 1984, inspired by several modeled Therapeutic Communities with the purpose of reaching out to heroin users and addressing some of their problems. This organization has been applying features of the Therapeutic Community, a community-based model that is basic to its structure, in particular accordance with humanistic philosophy. Therefore, it functions to strengthen the organization.

Nowadays, Proyecto Hombre has spread to 27 affiliates all over Spain, each of which share a common method and philosophy. The entire project has assisted more than 19,000 people with substance use and addictive behavioral problems including alcohol and drug abuse, gambling etc., as well as supporting their families throughout the year. Furthermore, around 80,000 people per year have been referred to the project as part of the prevention program that targets students, parents, teachers etc. The scope of activities is “prevention awareness,” “treatment and rehabilitation,” and “socio-labour reintegration,” predicated as a three-pronged approach. I am especially interested in this integrated approach, which was a major part of and reason for my overseas study in Spain for three years, from September 2014 till September 2017.

The Proyecto Hombre Association is a coalition of affiliates for promotion and implementation of a project based on humanistic philosophy. The affiliates undertake series of actions in the name of one organization but also in solidarity and cooperation with other institutes working in the same field. This cooperative model extends both the extent and efficiency of the project. The underlying humanistic philosophy is the key factor. It leads to the expansion of scale in the provision of humanitarian aid, and the status of being a private organization lends additional advantages, such as the flexibility to adapt to regional characteristics. Due to the resulting strengths and effectiveness of the project, it serves as a useful and positive reference for Japan towards making a community and an inclusive society.

Keywords : Proyecto Hombre, addiction, drug abuse, therapeutic community, supportive activity

i Doctoral Program, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University